

名古屋掖済会病院・えきさい看護専門学校

看護学生にコーチングワークショップを初開催 看護師としての実践力を高め地域を支える

公益社団法人日本海員掖済会名古屋掖済会病院(愛知県名古屋市、北川喜己院長)は、医療の質を維持・向上させるため、多職種による「対話」と病院全体の「心理的安全性」を一つの軸に新たな病院像を描いている。その実現のための取り組みとして、3月7日、14日に同法人が運営するえきさい看護専門学校(愛知県名古屋市、北川喜己校長)で「えきさい専門学校コーチングワークショップ」が初開催された。



コーチングワークショップの様子

今回のコーチングワークショップは、同病院の事務部長で、同校の医療人材育成を担う荒川智貴コーチの呼びかけで、名古屋市を中心に全国からボランティアで集まった23人のコーチが、4月に就職試験を控える同校の看護学生41人に対して向き合うという異例の試みとなった。荒川コーチは、「国家試験を前に意欲を失った、せっかく看護師になったのにやめてしまった、学生時代から学ぶことに『手触り感』を持ってなくなつたなどの話を数多く聞きます。そこで、入職前の看護学生にコーチングを実施することで、自分がやりたい

ことに踏み出す場、そんな自分たちを承認する機会を与えたい、そして、長く看護師として活躍してもらいたいという思いがありました」と語る。

集まったコーチに対しては、名古屋掖済会病院の中村裕子副看護部長が、看護師の現状などを説明。過度なストレスなどで看護師がバーンアウトし退職していること、内省ができなかつたり、心に問題を抱えている看護師が少なくないこと、特に自分の思いや考えを自分の言葉で話すことを苦手にする20代前半の看護師が多く、行動に結びつかないなどの実情を例に挙げた。背景には、コロナ禍で人との接触が少なく、スマホを使いSNSなどのデジタルな交流が中心となり、自分の思いを自分の言葉で伝える機会が圧倒的に不足していることがあるという。

コーチングワークショップでは、看護学生が自分と向き合うことを主眼に、看護学生の話を聞くプログラムが用意された。ワークショップ後、看護学生からは「自分のこ

とを認めてくれない両親と話をしようと思う」「自分はやっぱり看護師になりたいんだと再確認した」といった言葉が並び、対話が学生の生き生きとした表情を取り戻す力となったようだ。

医療現場の心理的安全性と多職種連携の深化

看護学生へのコーチングワークショップは、単なる一時的な教育プログラムに留まらない。山口弘子看護部長は、この経験が入職後の「心理的安全性」の向上につながるかと期待する。医療現場は患者の命に直結する場のため、指導は時に厳しくなりがち。しかし、叱られる経験が少なく、慣れない人から強く言われると萎縮してしまふ若手看護職員にとって、発言ができなくなることは重大な医療事故のリスクや、組織の生産性低下を招く「不安定な状態」を意味する。山口看護部長は「医療現場では多職種連携が重要です。連携がうまくいくと、患者さんの早期離床